

〔調査報告〕

## ヨーロッパ古楽事情 第3回ヒホン古楽講習会参加記

### Early Music in Europe On III Semana de Música Antigua en Gijón

小川伊作  
Isaku Ogawa

#### はじめに

本稿は筆者が2000年度大分県在外研修の助成を受けて、2000年7月7日から同年8月12日にかけて行った在外研修の報告である。今回の研修で筆者は、はじめにスペイン北部の町ヒホンで行われた古楽の講習会に参加し、ついでサンティアゴ・デ・コンポステラ、マドリードおよびその近郊での調査、最後にイギリスで研修を行った。しかし今回の研修の最大の目的はヒホンでの講習会であった。したがって本報告では当該講習会についての報告を主たる内容とし、ほかの研修については日程表で提示するにとどめることとする。

#### 1. ヒホン古楽講習会と参加に至る経緯

マドリードから高速バスで約6時間。ヒホンはビスケー湾に面した小さな町である。その起源は古く古代ローマ時代にさかのぼり、現在でもその時代の遺跡が散見される。もっぱらスペインおよび近隣諸国の避暑地として知られ、日本の観光ガイドにその名は見あたらない。その小さな町に3年前から古楽の講習会が開かれるようになった。Semana de Música Antiguaと名付けられたこの講習会は、二つの点で世界中の古楽関係者の注目を集めることとなった。ひとつはそれまで限られたアーティストを除き、古楽の世界ではイギリス、オランダなどに比べ存在感の薄かったスペインで開催されたこと。ふたつめはリュートなど楽器製作コースが設置されていたことである。特に後者はそれまでまったく例のないことであり、どのような方法で行うのか、どのレベルの楽器ができあがるのか興味の尽きないところであった。しかも受講資格として、楽器製作の経験は問わないとある。しかし筆者が同講習会参加を最終的に決断したのは、前年の10月に東京で開催された手工弦楽器展に来日していた講習会のオーガナイザーであり、楽器製作コースの講師でもあるカルロス・ゴンザレスに会い、翌年はビウエラを製作する予定であ



講習会会場となった文化センター

## 小川伊作

ることを知ったことと、カルロス製作のビウエラを実際に手に取ることができたことによる。

### 2. 2000年度ヒホンの講習会の内容

第3回目にあたる2000年度の講習会の内容は以下の通りである：

実技コース	セミナー
チェンバロ	古楽の分析
バロック舞踏	古代ギリシア・ローマの音楽
リコーダー、コルナミューズ	グループレッスン
バロック・ギター	声楽
楽器製作	グレゴリオ聖歌
声楽	愛好家と音楽家のための舞踏
ヴィオラ・ダ・ガンバ	声楽と器楽と舞踏のアンサンブル
弓奏ヴィエル、リュート、シトール、中世ギター	
バロック・ヴァイオリン	
バロック・ヴィエル	

講習会は楽器製作コースが実技コースより1週間早く始まり、2週目で実技と一緒にになる。7月10日より23日までの14日間の日程（ただし中1日は休息日）であった。会場は町中心部にある文化センターの一室を工房として使用。楽器製作コースの1日のスケジュールは、毎日朝10時～14時が午前の部。昼食（14時～16時）を挟んで16時～20時が午後の部。1日合計8時間、工房で製作指導を受けた。20時以降は自由時間であるが、講習会後半には毎晩一流のアーティストによるコンサートが開催された（講習会参加者は無料）。また会期中は会場の一室で、ギターの歴史的楽器の展示・レクチャ・コンサートが開かれ、自由に見学することができた。

またこの講習会はヒホン市の後援を得て行われているとのことであった。会期中同市市長が出席してレセプションが行われた。またスペイン北部アストゥリアス地方特産のシドラ（リンゴを原料とした発砲酒）ミュージアムでの招待パーティなども開催され、講習会参加者は、アンダルシアとはまた異なるスペインの雰囲気を楽しむことができた。

### 3. ビウエラについて

講習会の内容に入る前に、今回製作した楽器ビウエラについて簡単に説明しておきたい。ビウエラvihuela[スペイン語]は16世紀スペインで用いられた撥弦楽器。当時のギターが4コースだったのに対し、6または7複弦を備え、調弦は同時代のリュートに準じるが、ギター様の胴を持っていた。宮廷および貴族階級に愛好され、1636年のミラン以降7冊の曲集が出版された。楽譜はイタリア式タブラチュアで記譜されたが、ミランのみ上下逆の方式を用いた。鍵盤楽器、ハープと共用の曲集も編まれ、そこでは独自のタブラチュアが用いられた。イタリアと中南米でも使用されたと考えられる。重要な点は、リュート全盛期の16世紀に、スペインでリュートに代わって愛好された楽器であることと、17世紀にはいると、ビウエラより1コース弦の少ない5コース・ギターに取って代われ、完全にその姿を消してしまったことである。

また現存する楽器でビウエラと考えられるものは少なく、3台のみなのである。しかし先に述べた当時の出版曲集および理論書（ベルムード[1555]）から推し量る限り、ビウエラ上で奏でられた音楽は、スペインの黄金世紀Siglo de Oroにおいて、それ自体音楽史上一つの頂点を形作っていたことは間違いない。しかも筆者の知見の及ぶ範囲では、現在すでに十分に良質の楽器が復元されているリュートに比べ、これら現存するレパートリーの演奏に耐えうるビウエラの復元がなされているとはいえない状況がある。史料と現実との計りがたい断絶もまた、音楽史研究者をビウエラに向かわせた動機なのである。

#### 4. ビウエラ製作の工程

次に実際にビウエラをどのようにして製作したかを、順を追って記すことにする。第3回の今回、楽器製作コースの受講生は合計10人。筆者以外はすべてスペイン人であった。受講生の中には、音楽愛好家、楽器製作者（ビウエラは初めて）、プロのギター教師などが含まれていた。

##### 4.1. 材料と工具

材料は基本的に前もってある程度製材されたものが受講生に渡された。事前準備された箇所は平面・直線が必要な部分、完全な直角を要する部分、センターを出す必要がある部分である。材質はネックが梨、側板、裏板およびブリッジがウォールナット、指板がローズウッド、表板が松、ペグが黒檀であった。

工具は持参が望ましいとされたが、筆者はすべて現地で支給されたものを用いた。その種類はシンプルで、数も驚くほど少ない。使用したものを次に挙げる：

のこぎり かなな カッターナイフ（大、小）のみ（大、小） ペグ・リーマ ペグ・シェーパー やすり 定規 紙テープ サンドペーパー クランプ 木型 各種治具 作業台 接着剤（タイトボンド） 計算機

楽器製作においては通常接着剤としてにかわが使用されるが、時間の限られた講習会であり、受講生に未経験者が含まれていることから合成樹脂の接着剤タイトボンドが用いられた。また計算機はフレッチング（後述）の位置を算出するために用いた。電動工具としては、ボール盤、サンダー、糸鋸が用意され、部品を荒取りするのに講師が用いたが、もちろん無くても支障はない。電気エネルギーが発見される以前の楽器であるからだ。

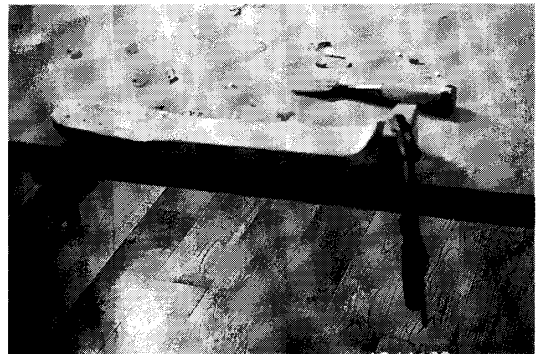


写真1 ネックの削りだし

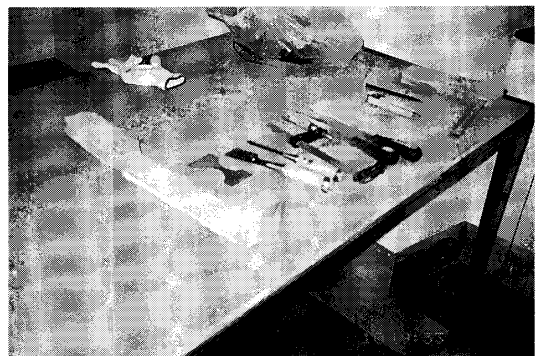


写真2 ネックと各種道具

#### 4.2. 7月10日；1日目：ネックの成型

受講生は荒取りされたネック材を渡され、ノミと木工用やすりで所定の寸法・形に成型する。指板が貼り付けられる面は平面を出してあり、本体との接合部分には鋸が入り、センターも引かれ、糸倉の表面は付き板が張られている。しかし作業台に材料を固定し、慎重に削りすぎないように加工するのは根気と時間と力を要する。

#### 4.3. 7月11日；2日目：ネックの仕上げ、ロゼッタの試し彫り

昨日に続きネックを仕上げる。あらかじめ形ができたところで、講師より型紙を渡され、それに合わせてネックの太さ、丸みを微調整し、最後にペーパーで仕上げる。

リュートと同様サウンドホールには透かし彫りが施されるが、用意された、10cm角の板（表板と同じ材質）に試し彫りを行う。これでOKができれば、表板に直接透かし彫りを掘ることが許可される。筆者はなんとか及第点をもらい、直接彫ることができた。もしうまくいかない場合は、所定の大きさに表板をくりぬき、あらかじめ彫られたロゼッタをはめ込むことになる。

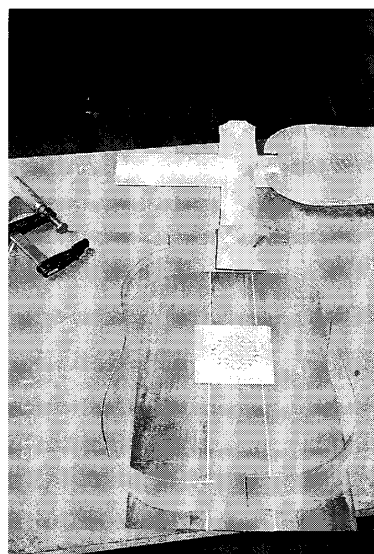


写真3 成型された側板。  
後方は胴の木型

#### 4.4. 7月12日；3日目：側板の成型

側板は、板厚と幅を必要な寸法に仕上げたものを渡され、まず楽器用アイロンで木型に合わせ曲げる。作業そのものは力もいらず、困難な点はなかったが、完全に型に合うまで微調整することを求められ、それに時間を要した。最後は型に圧着して一晩寝かせる。

#### 4.5. 7月13日；4日目：側板とネックの接着

最初に完成したネックを木型に接合する。木型は1.5cmほどの合板で作られ、ボディの内型となる。木型と接合用の角材はあらかじめセンターを出してあり、まずネックに角材をセンターを合わせながら半分の長さだけネックの指板側に重ね、木ねじでとめる。次に角材の残りの部分を木型のセンターと合わせながら、木型に木ねじでとめる。その際木型の上側で、ネックのブロックの切り込みが、木型の外縁と位置が合っていることを確認する。

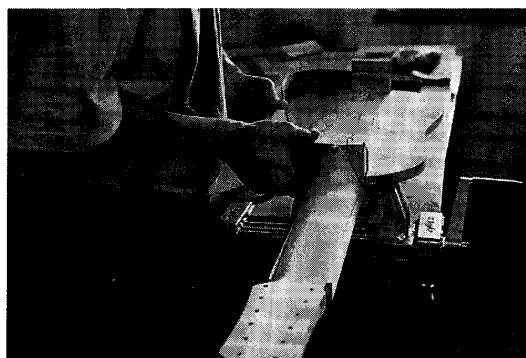


写真4 側板とネックの接着

木型の下側に、側板接合用に2cmほどの木片を仮止めし、木型の外縁と一致するように成型する。

次に一晩寝かした側板をネックに接合する。上側はネックのもとの溝を広げ、そこに側板の上端をはめ込む。下側は1cmほど空くようにして、V字形にカット。先に仮止めした板に接着。先にネックと接合し、後でこのスペースに化粧板をはめ込む。

4.6. 7月14日；5日目：ブリッジ成型。側板下部仕上げ。裏板成形。

ブリッジの材料は長さ230mm、下部幅15mm、上部幅7mm、弦を留める穴を開けた状態で提供される。それをのみとカッターナイフを用いて、所定の形に仕上げていく。



側板下部には、別の板を化粧板としてV字形の溝にはめ込み、すりあわせをする。完全に隙間がなくなったことを確認し、接着剤を流し込んで接着。

裏板の材料は3枚の板を、2本のインレイ（飾りの細い木）を挟んで接着した形で提供された。したがって作業としては板に胴体の形を写し取り、それに合わせておおまかに裁断すればよい。

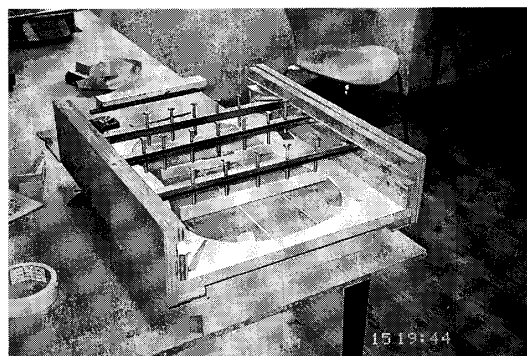


写真5 裏板と横木の接着

4.7. 7月15日；6日目：裏板と横木の接着

裁断した裏板に横木を接着する。3本の横木の接着には独自の治具が用意されており、確実に接着することが可能である。なお16日は休息日。

4.8. 7月17日；7日目：裏板の横木の削りだし、裏板と側板の接着

横木をのみを使って上部を薄く、両端を低く削る。それが終わると裏板を側板に接着する。接着の部位の固定には、紙テープを用いたが、支障はない。また接着強度を確保するために、ギターなどでは、側板の縁に細い板を張付けるが、ここではそのようなこともしない。これは軽量に仕上げするための工夫であろう。

接着剤が乾いたら、側板よりはみ出している裏板を、ナイフとやすり、ペーパーを使って、なめらかに仕上げる。

ついで表面版の作業に入る。表面版も木目のそろった板を2枚接ぎ合わせ、おおまかに木取りし、センターを出した状態で提供された。両面をペーパーで仕上げた後、センターを引き、下から280mm（+余白）の位置に印をし、トレーシングペーパーに転写したロゼッタのデザイン紙を貼り付ける。

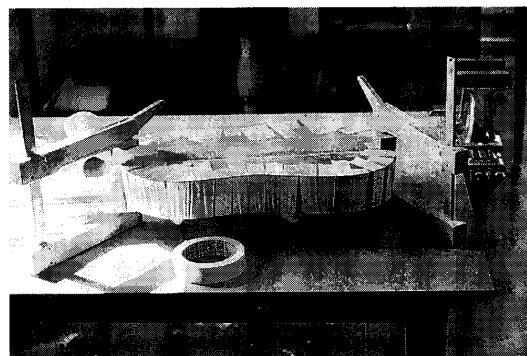


写真6 裏板と側板、ネックとの接着

4.9. 7月18日；8日目：ロゼッタを彫る

前日に準備したロゼッタを彫る。図柄にそって慎重にナイフを入れていくが、木目により固さが異なるので、注意が必要。ロゼッタが完成したら、表面をペーパーで研磨し、型紙をすり落としてしまう。

4.10. 7月19日；9日目：表面板と力木の接着

ロゼッタが完成した表面板に力木を接着する。裏板で使用した治具をここでも使用する。力木は現在のギターなどと異なり、横に渡すものが2本。斜めのものが1本とシンプルである。ただし裏板と異なり斜めの力木があるので、新たな治具を斜めに付加して接着を行う。



写真7 ロゼッタを彫る筆者

4.11. 7月20日；10日目：、ブリッジと表面板の接着、表面板を胴に接着

ブリッジを表面板に接着する。すでに力木が裏に接着されているので、これも特製の作業台を使用する。ブリッジの位置決めは音程に直接関わるので、正確を期して行い、接着手順も誤差の少ない方法がとられた。具体的にはセンターに正しく直角にブリッジ上端の位置を線引きし、それに合わせスクレーパーをテープで表面板に固定。そこにおつけるようにブリッジを接着する。



写真8 完成した胴と、表板へのブリッジの接着

4.12. 7月21日；11日目：表面板の胴体への接着

ブリッジの接着が乾燥したら、裏板同様表板を側板の小口に直に接着する。この時側板の中央部分を4mm程ゆるやかに削る。上下のブロックにも接着剤を十分に付け、表面板には前もって固定用の紙テープを貼っておく。

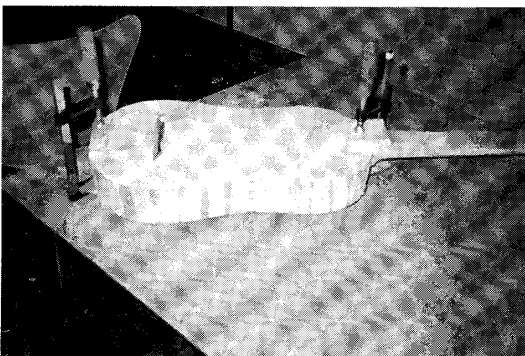


写真9 表板の胴への接着

4.13. 7月22日；12日目：指板の接着

指板はローズウッドの薄板を用いる。少し厚めに製材されており、後で楽器のコンディションに合わせて、削っていく。最初に8フレットの位置で表面板をカットし、その両脇を1cmほど矢印形に切り込みを入れ、指板の端材をはめ込む。次に所定の長さに仕上げた指板を表面板との間に隙間ができないように注意して、ネックに接着する。

4.14. 7月23日；13日目：指板仕上げ、全体の表面仕上げ、ペグの穴開け

接着剤が乾いたら、ネックからはみ出している指板をナイフとやすりで仕上げる。ひととおり楽器が完成した状態で、全体の仕上げをする。ある

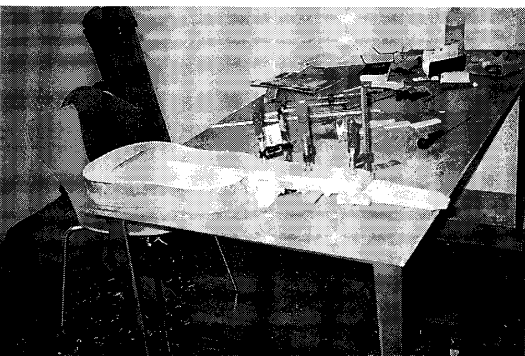


写真10 指板の接着

程度ペーパーをかけた段階で、水を含ませたスポンジで楽器全体を湿らせる。こうすることで木の細胞が開き、より平滑に表面を仕上げることができるのである。最後はスチールウールで磨き、オイルを薄く塗って仕上げる。ニス等は用いないので、ほとんど白木の状態である。

ペグ穴はあらかじめドリルで開けてある穴を、ペグ・リーマを用いてテーパーを付ける。この時、上下左右に傾かないことと、必要以上に穴を大きくしないことに注意する。

つぎに上駒を付ける。上駒は獣骨のものが配布された。がたのないように成型し、やすりで弦の通る溝を刻む。ペグは黒檀の成型済みのものが提供され、ペグ・シェイパー（大型の鉛筆削りのようなもの）で仕上げ、ペグ穴に合わせる。この段階で弦を張る。音程の変化は出せないが、開放弦の音を聴くことができる。

フレッチングの設定方法は幾何学的方法、弦長の分割による方法など幾通りか知られているが、ここでは4桁の数字から、弦長に応じた上駒からの距離を算出する方法がとられた。これにより必要なフレッチングを得ることができる。算出した位置を鉛筆で指板上にマークする。このとき定規を使用するが、位置がずれないように定規を指板にテープで固定して行う。その後ポンチで印を指板に刻み、それに合わせフレットを巻いていく。

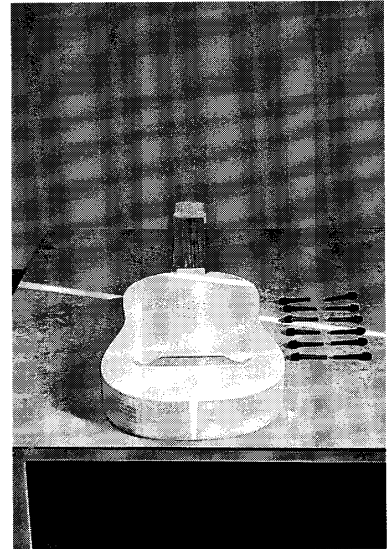


写真11 ペグ穴と上駒を残し完成

##### 5. ヒホン古楽講習会をふりかえって

今回の研修の第1の目的であるビウエラの製作については、その構造、製作方法について適切な指導を受けることができ、出来上がった楽器の完成度の高さといまって予想を上回る成果が得られた。また同時期開催された楽器展示会では近年パリで発見されたビウエラの写真と図面が公開されたことも大きな収穫であった。新発見のこの楽器は、表面板に力木が全く用いられていない点が注目されるが、表面板の厚みも最大で4mm近いという、現在の我々の常識を大きく越えたものであった（通常ギター、リュートでは1mm~2.5mm程度）。発見から2年経った今では、すでにこの復元楽器が製作されており、どのような響きがするのか興味の尽きないところである。

また会期中毎晩催されたコンサートは、日本では聴けない内容のものも多かった。古い方は古代ギリシアにまでさかのぼり、14世紀から17世紀初期の音楽に比重が置かれている点、総じてバロッ



写真12 完成したビウエラを持った楽器製作受講生全員

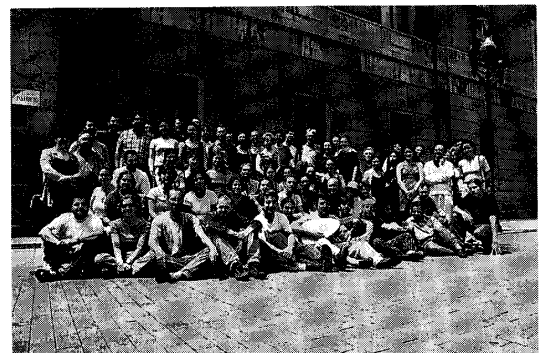


写真13 文化センターの前庭での全体集合写真

ク中心の日本の古楽コンサートのプログラムとは大きく異なるものであった。スペイン独自の感性、音楽に対する関心の持ち方に、強く印象づけられた2週間であった。

## おわりに

今回の研修ではスペインに24日間、イギリスに11日間滞在した。ヨーロッパ古楽の最新事情の調査という当初の目的は相当程度達成し得たと考えている。すでに述べた楽器製作における成果はもちろんのこと、日本とは傾向の異なるスペイン独自の古楽への態度および独自の音楽活動を、講習会、コンサート、史料調査によってうかがい知ることができた。日本でも情報が比較的豊富なイギリスでの研修においても、若手のアジア系古楽グループ、シャリヴァリ・アグレアブルのコンサートが聴けたことは大きな収穫であった。従来オリジナルを尊重することが大前提であった古楽の世界に、同時代の様式による編曲という新たな試みを導入した彼らのコンサートは、斬新で魅力的な響きにあふれており、21世紀の古楽のひとつの方向を示しているように思われた。

## 【参考資料】

### 1. 全研修日程

7月7日 出国

7月8日 マドリード着

7月9日 ヒホンへ移動

7月10日～23日

ヒホンにて古楽講習会 *Semana de Música Antigua*参加。16世紀スペインで用いられた撥弦楽器ビウエラを1台製作。会期中16世紀から20世紀までのオリジナル・ギターの展示会が開催され、毎日歴史的楽器によるミニ・コンサートが催された。また講習会後半は毎晩コンサートが開催された。

7月24日 サンティアゴへ移動

7月24～25日

サンティアゴ・デ・コンポステラで研修。聖ヤコブの聖地である大聖堂を視察。ちょうど聖ヤコブの祝日に当たっていたため、25日には合唱・オーケストラ付きの荘厳ミサに立ち会う。

7月25日 マドリードへ移動

マドリードへ移動。同日ウニオン・ムシカル・エスパニョーラ（楽譜出版社）で資料調査。

7月26～30日マドリードで研修

26日 王宮視察。同宮所蔵の楽譜所蔵目録購入。夜は国立サルスエラ劇場にてサルスエラ「*La del Soto del Parral*」鑑賞。

27日 市立音楽図書館視察。参考資料室にてスペイン国内の大聖堂の楽譜所蔵目録等



## ヨーロッパ古楽事情

重要文献の調査を行う。同日リアル・ムシカル（楽器店）において資料調査。

- 28日 楽器店HAZENにて資料調査。
- 29日 アランフエス宮殿視察。
- 30日 エル・エスコリアル視察。
- 31日 ロンドンへ移動
- 8月1日～10日イギリスにて研修
- 8月1日 大英博物館視察。ケンブリッジへ移動
  - 2日 コンサート「グローヴ座の音楽家達」聴取（ギルドホール）
  - 3日 ジェイムス・オドンネル（ウェストミンスター大寺院楽長）、オルガン・リサイタル聴取（クライスト・カレッジ・チャペル）
- 8月4日 オクスフォードへ移動
  - 4日 シャリヴァリ・アグレアブル「バッハの鍵盤楽器の遺産」聴取（エクセター・カレッジ・チャペル）
  - 5日 シャリヴァリ・アグレアブル「バッハの鍵盤楽器の遺産」聴取（エクセター・カレッジ・チャペル）
  - 6日 シャリヴァリ・アグレアブル「フランス・バロックの管弦楽編曲と室内楽」聴取（エクセター・カレッジ・チャペル）
  - 7日 コンサート「The Merrie Monarch」聴取（ロンドン、ホワイト・ホール）
  - 8日 アシュモリアン博物館視察。  
シャリヴァリ・アグレアブル「悲しみの宗教歌」聴取（エクセター・カレッジ・チャペル）
- 8月9日 オクスフォードからケンブリッジへ移動。
  - 9日 アンヌ・ペイジのオルガン・リサイタル「クラヴィア・ユーブング第三巻全曲」聴取（トリニティ・カレッジ・チャペル）
  - 10日 フィッツウイリアム博物館視察。  
「バッハの2台、3台、4台のチェンバロ協奏曲」聴取（ウェスト・ロード・コンサート・ホール）
- 8月11日 出国
- 8月12日 帰国

## 2. ヒホン講習会中のコンサートプログラム

- 7月14日 エスペリオン21・コンサート
- 7月15日 講師演奏会
- 7月16日 ロルフ・リルヴァン・リュート・リサイタル
- 7月17日 「アルテ・ファクトウム」コンサート
- 7月18日 アンサンブル・ケリョス・コンサート
- 7月19日 中世音楽コンサート
- 7月21日 コンチェルト・イタリアーノ・コンサート
- 7月22日 スペイン・バロック・コンサート

小 川 伊 作

7月23日 ファイナル・コンサート (受講生および講師)

小川伊作 大分県立芸術文化短期大学 音楽科 助教授

E-mail: ogawa@oita-pjc.ac.jp